

### Ⅲ 研究内容の概要

#### 1. 各学習分野『学習における「公共性」育成プラン』の作成

実践を基に『学習における「公共性」育成プラン』作成の取り組みを始めた（具体的な詳細はIV章）。

3年次完成をめざす。これは、本校の教育課程の中で、今回の開発内容を表すものである。

それぞれの学習分野目標について、現行学習指導要領（教科）との比較検討をしながら策定する。そして、目標に向かって育てる「公共性リテラシー」を一覧にする。実際の学習活動例も記載する。

まず第3学年第4学年を対象として作成した。

中学年に的を当てた理由は、教科（学習分野）担任制に移行する時期であり、異質なもののとの出会いの機会が豊富に用意できること、発達的にも抽象的に考えたり客観的に見る目が芽生え、表現も素直で比較的柔らかく伸びる時期であること、前回の「接続期研究」で研究の谷間になっていた点が挙げられる。

『学習における「公共性」育成プラン』を作成する試みは、教師それぞれが児童の学びの姿を「公共性」の視点でていねいに見ることや見直すことにつながっている。

以下「公共性リテラシー」を育成する指導例から学習分野の特徴を紹介する。（報告書紙数制限のため一部学習分野のみです）

#### <市民>

##### ① 「時事的な社会事象について、他者との差異や葛藤を感じる問題」を扱う

【具体例】「諫早湾の干拓をどう考えるか」「高速道路無料化をどう考えるか」「米の生産調整をどうするか」「海外支援の内容の優先順位を決めよう」など具体的な時事問題を取り上げる。このことは、子どもを、実際に社会で起きている問題について向かいあわせ、日本の市民としてよりよい社会づくりについて、関心を深めることができる。また、社会的な問題の解決や、政策の選択においては、必ず不利益を被る人々の存在があることに気づかせることができる。これは、以下の②③とは異なり、明らかに、社会事象を内容とする学習分野だけにしか取り扱えない特徴である。

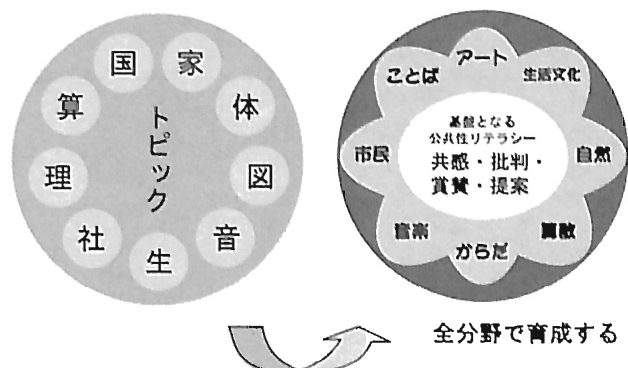
##### ② 「他者との差異や葛藤を感じる問題」を扱う

【具体例】「消防設備を一つ増やすことができるとしたら、何をどこに増やす?」「東京都らしいところベスト3を選ぼう」「戦後史の三大ニュースを決めよう」これらは、①と同じように、「他者との差異や葛藤を感じる問題」である。しかし、①が時事問題で、実際に社会で生きている様々な立場の人々が利害関係にあることを学ぶのに対して、②では、学級内の子ども同士の関係だけにおいて対立が生じ得る。それは、特別活動で学級の催しを決めるのに似ている面がある。

##### ③ 「他者との差異を認め広げる」ことが可能な内容を扱う

【具体例】「北海道十勝地方に会社をつくろう」「沖縄に会社をつくろう」「未来の自動車のプランをつくろう」「白神山地を保全する方法を考えよう」「聖武天皇、鑑真和上、行基、農民が会話をしたら、どんな劇になるでしょう」など、子どもたちが自分の創造性を発揮しアイデアを考えて交流しあえる。

#### 公共性リテラシーの探求と育成



## <音楽>

育てたい「公共性リテラシー」を以下のように捉えて指導した。

- ・必要な道具を用いて、「私」を表現しようとする
- ・「異なる他者」の表現を味わう
- ・他者とともに、音楽表現を生み出そうとする
- ・自らの学習を設計し、自律的に活動する

### ① 必要な道具を用いて、「私」を表現しようとする — 自分の好きな音楽にこだわる —

「ミュージックプランに基づく学習」に取り組んで2年目の5年生。4年生の時よりも、興味がぐんと広がり、ポップスを大人数で演奏したり、CMの曲の音を自分たちで探しながら練習したり、ゲームの曲をリコーダーで吹いたり、自分のこだわりに向かっていく姿が見られた。

### ② 「異なる他者」の表現を味わう — 自分なりに感じる —

「ミュージックプランに基づく学習」を5月から始めた4年生。興味のある楽器に向かい、それぞれがあふれんばかりのエネルギーで楽しむ。子ども同士で評価することについては「人間関係が介入してしまう」という危惧もあったが、権力関係であれば組みかえていきたいし「子どもの人間関係を、音楽を通して変え得る」風土をつくっていかねばならない。「え！S男が？（すごい！おもしろい！）」の評価もあり子どもの評価の基準は様々である。「間違わなかったから◎」も「最後までねばったから◎」も「あのががんばったから◎」もある。その反対もある。「いいね」「それはなんか変だな」を自分なりに感じその異なりを感じあうことを大切にしたい。演奏者にも聴衆にも居心地のいい表現空間が必要である。

### ③ 他者とともに、音楽表現を生み出そうとする — 関わっていく中で変容する —

低学年では「わらべうたあそび」を活動の中に入れていく。関わってあそぶ中で、もめる、葛藤する、なんとか折り合いをつける、などの様々な子どもの姿が見られる。教材として有効である。

## <自然>

育てたい「公共性リテラシー」を「授業構成・方法」と「子どもの学び・見取り」の2つの視点から捉えて指導した。

### (授業構成・方法)

1. 自分の考えをもつ
2. 自分の考えを発表する
3. 友だちの意見を聴く
4. 友だちの意見と自分の考えを摺り合わせる
5. 他者の意見を分析したり、批判したりする
6. 全体で、考えを高め合う

### (子どもの学び・見取り)

- 1・2年生 [話す] …自分の考えをしっかりと持ち、それをみんなの前で話す
- 3・4年生 [聴く] …友だちの意見をしっかりと聴き、自分の考えとの類似点や相違点に気づく
- 5・6年生 [高めあう] …他者の意見もしっかりと聴いたうえで、それを分析したり、批評したりしながら、互いに高めあい、より高次の考えへと発展させていく

今年度の成果として、「友だちの意見を聴く」ためには4人グループでの意見交換が有効であることがわかった。課題として、「既存の知識では解決できない事象の提示」が教材研究として重要である。

## <からだ>

### ① 感触や感覚など「自分のからだで感じる体験」

幼児期からの連続性を重視し、小学校を卒業するまでの間に様々な感覚を自覚的に体験させることをねらった単元を構成した。竹馬や一輪車のようなバランス感覚、床やマット、鉄棒などで様々に回転する感覚、トランポリンのように浮遊する感覚、例えば「浮く・泳ぐ運動」において「水中での運動を楽しく行う」ことを水の感触に親しむとともに水を感じる感覚そのものを楽しむことと捉える児童が増えた。

### ② 「友達との関わりあい」の重視

例えば、マラソンの練習を行う際に「駅伝方式」を採り入れるなど、個人の運動能力を高めることが求められる「体づくり運動」や「器械運動」、「浮く・泳ぐ運動」「走・跳の運動」の学習内容においても、お互いに教えあったり、補助しあったりする必然性のある場面を多く設けて、友達と励まし合って練習ができるようにと努めた。

その結果「ゲーム」においては、コートやルールを工夫するだけではなく、協力してプレーする必要性の高い種目を積極的に楽しむ児童の姿が見られた。

### ③ 「運動する場」への意識

例えば、モラルやマナーといった「決まりを守って仲良く運動する」という項目では、そのルールがなぜ必要なのかを考えさせたり、審判の役割の大切さを実感できたりするような授業方法を重視した。その結果、「運動する場」や用具（器械・器具）の安全に気をつける態度が育ってきている。

### ④ 「その運動をすることの意味や価値」を考える

保健領域においては「自分のからだと向き合い、からだを知り育て守る能力を身につけさせるとともに、仲間と関わりあうことを通して、健康なからだをつくろうとする態度を育てる」ことを目標に、「自分や周りの人の体や心は個々に違っていることを感じる」「仲間との出会いや活動を楽しむ」ことをメンタル面から指導している。医師が患者に対して行うインフォームド・コンセントのように、新しい単元の導入場面において、何のためにそのような運動やゲームを行うのか、それを行うことで何を身につけることができるのか、メタ認知的な働きかけを行うことを大切にした。児童は働きかけに応じてよく考えるようになってきている。